

2014 年度 事業報告書



学校法人 **アジア学院**
アジア農村指導者養成専門学校

annual report

2014/4/1
～ 2015/3/31

1	ご挨拶
2	震災復興
4	研修報告
6	カリキュラム
7	特別教育プログラム
8	フードライフ
11	放射能対策
12	共同体生活
13	卒業生活動
14	研修評価
16	国内事業
17	アジア学院サポーターの会 アジア学院北米後援会
18	アジア学院コミュニティ
19	支援者・支援団体一覧
20	会計報告
back	2014 年度卒業生

2014 Achievements

2014 年度の主な功績

- ・ 大津校長、震災復興事業をほぼ完成させて、任期満了にて退職。
- ・ 震災復興事業 ～ オイコスチャペル、鶏ト殺施設、バイオガスシステムの完成 (→ 2 ページ)
- ・ キューバからの初めての学生の受け入れ
- ・ ランチ in Tokyo(初)、サポーターの集い、西日本キャラバンなど、サポーターの皆さんと顔と顔を合わせての交流や繋がりが充実



ご挨拶

greetings

2014年度アジア農村指導者養成研修プログラムを終え、計15カ国27名の本科生と3名の研究生が無事卒業し、それぞれの場所で働きを続けています。特に2014年度は、西アフリカのリベリアから来た3名の学生を通して、西アフリカで感染が広がったエボラ出血熱で苦しむ人々の問題を私たちの問題として考えさせられました。アジア、アフリカなどで起こる自然災害、病気、民族紛争、宗教対立、貧困、飢餓などで苦しむ人々の問題を共に担う草の根農村指導者を養成することは、創立以来アジア学院に負わされている課題だと考えています。また、毎年の研修プログラムのために、ボランティアや各地の多くの人々の惜しみない協力を得、私たちの働きが国内外の多くの人々の協力・支援によって成り立っていることを強く感じています。東日本大震災後、アジア学院農作物販売やワーキングビジターなどの減少がありましたが、幸いにも震災前の状況に回復しつつあります。また、企業研修やアジア開発銀行主催の研修プログラム、米国 St. Olaf 大学学生受け入れなど、アジア学院のノウハウを用いた新しい取り組みも始っています。更にこの地域における放射能汚染問題について人々の関心が薄れつつある中で、市民向けのアジア学院ベクレルセンターの放射能計測活動を続けてくださっているボランティアの皆様の働きに感謝します。

東日本大震災直後から継続している震災復興事業は、2014年度においてオikosチャペル、鶏ト殺施設、バイオガスシステムを完成させることができました。震災復興事業は、2015年度で終了予定です。今後アジア学院のメイン事業に力を注ぐため経常収入を得る努力をせねばならないと考えています。言うまでもなく、アジア学院の経常収入の多くは寄付金によって成り立っています。消費税値上げなどの厳しい経済状況の中でも、変わることなくさまざまな形でご支援いただいている国内外の個人・団体の皆様に感謝を申し上げ、2014年度事業報告書をお届けさせていただきます。

学校法人アジア学院 理事長 大津 健一
アジア農村指導者養成専門学校 校長 荒川 朋子



副理事長
法人財務室長

遠藤抱一

震災 復興

reconstruction

2011年の震災直後から、多くの方々の多大なご支援を頂き、昨

年度までに女子寮の修繕、事務棟、コイノニア食堂棟、教室棟、豚舎、男子寮の再建と順次復興事業を進め4年目に入りました。震災直後の、まさに茫然自失であったアジア学院がここまで復興出来たのも、内外の支援者の方々の経済的、物質的支援と共に、志を分かち合う深く強い祈りの賜物以外の何物でもなく、心からの御礼を申し上げますと共に、14年度に完了した事業を次の通りご報告いたします。

女子寮屋根の改修

残されていた女子寮の屋根の改修を、5月米国合同メソジスト教会のご支援により、全面的に葺き替えました。これで昨年度新築された男子寮と合わせて、全学生が安心安全のうちに憩える生活拠点が整い、研修に専念出来る環境になりました。

食品加工室を改装して鶏の屠殺処理場に

7月には、マナハウス食品加工棟1階の実習室を、鶏の屠殺処理場へ改装する工事も完了しました。計画では独立した施設を予定しておりましたが、2002年度の完成後充分活用しきれいでなかった食品加工実習室を改装し転用することが、最も合理的と判断した結果でした。無事役所の許可もあり、自給する動物タンパク質の中核である鶏肉の処理を支える大切な機能を果たします。この施設も、米国合同メソジスト教会のご支援を頂きました。



■ バイオガスシステム

オイコスチャペル献堂

9月15日41回目のアジア学院創立記念日に、ご来賓の方々に学生、役員、職員並びに工事関係者を加え約250名の出席を得て、オイコスチャペルの献堂式を執り行いました。多様性を維持することを最も大切な価値の一つと位置づける私達にとって、キリスト教の価値観を基礎としながらも、様々な宗教を背景とする学院共同体の祈りの場をどう表現するのかは些か難問でしたが、幸いこの地に古くから伝わる日本の建築様式である古民家を移築し再生させるという知恵に、多くの人々の共感が得られたのを感じました。

日本基督教団、米国カリタス(CRS)、東京ユニオン教会、カトリック麹町教会等にご支援頂いたほか、韓国メソジスト教会、台湾基督長老教会の同じアジアの教会からもご支援頂いたのは、アジアの農村に暮らす人々に、開発指導者の養成をもって奉仕するという学院の創立の動機を思う時、これらの国々からのご支援には一際感慨深いものがあります。

食堂をコイノニア、食品加工棟をマナハウスとして来た経緯を踏まえ、家、ホームまたエコノミー、エコロジー、エキュメニズムの語源でもあるギリシャ語のオイコス冠してオイコスチャペルと名付けました。又コイノニアと職員住宅の中間に位置する高低差のある立地なので、アクセスに階段設置が必須でしたが、その費用の捻出に頭を痛めていたところソロモン諸島、インドネシア、ミャンマーの学生に職員の潘牧師が加わり、自給の資材で風情ある階段をあっさり作り上げてしまい、ARI 伝統の共同作業の力と自助自立のスピリットの発露を見た思いでした。

バイオガスシステム・液肥槽

昨年度完成した豚舎2棟のうち東側の繁殖棟のフロアー3区画を発酵式床ではなくコンクリートにし、排泄物を液肥層へと導き、バイオガスが生産出来るようになりました。寒冷期でも発酵が進むようソーラーパネルにより槽の保温を図ります。発生させたガスを、約100メートル下方の農業関連施設へパイプで供給し、動物の餌の煮炊きにも使います。このシステム構築には、米国福音ルーテル教会等のご支援を頂きました。

15年度には、農業関連施設、職員住宅及び排水路等の最後の第4期諸事業完了を目指しますが、14年度事業の完成をもって、本来の指導者養成研修を全うする環境が整いましたことを、ご支援賜りました方々への感謝と共にご報告致します。

オイコス
OIKOS
チャペル
ができるまで



july 2013 計画チームが古民家の下見をする



july 2013 皆で解体作業に加わる



august 2013 骨組みが丁寧に解体される



from february 2014 冬から春にかけて建築作業が進む



june - july 2014 みんなで土壁を塗る・・・完成の日が近い!



農村指導者研修プログラム

2014年4月1日～12月13日

研修 報告

training program



今年度も神様の豊かな恵みと導きの内に、また多くの方々に支えられて、15カ国27名(入学時は28名。一名が家族の病気を理由に途中帰国)が研修を終えることができたことを心より感謝申し上げます。

この27名がたどってきた道は、平坦ではありません。言葉の壁、全く違う食べ物や気候、考え方も年齢も違う人々の中で研修は始まりました。最初は英語での会話が成立しなかった学生。子供のことが心配で泣いた夜。母国で起きたエボラ出血熱のニュース。家族の突然の死を知らされた者もいます。言葉や考え方の違いからぶつかり合う日々。でも学生達は「9か月なんて短すぎる。楽しかった」といいます。

学生はNGOや農民組合などの団体に所属し(日本国内からの学生を除く)、学院の研修に送られてきます。従って研修の受益者は学生達自身ではなく、彼らの団体並びに活動地域の人々です。「この学びを待っている人々がいる」という思いが彼らのモチベーションを保ち続けました。

多様性を受け入れる

始めはストレスだった多様性も、次第に学びの機会となり、見知らぬ国から来たルームメイトは、かけがえのない存在となりました。違う国、違う文化、違う宗教、違う言葉、年齢の差も気にならなくなり、学院の食事を楽しむようになりました。自分の考えを述べ、人の話を聞き、違う意見を受け入れられるようになり、ファシリテーションも身につけました。これらは教室よりもむしろ、グループで管理する農場やキッチンで身につけられ実践されていきました。こうして学院の日常の中で、彼らは研修の柱であるサーバントリーダーシップ(人に仕える指導者)について考え続けたのです。

研修分野は多岐にわたります。指導者論・環境と開発・ジェンダー論・持続可能な農業・農薬の危険性など、座学は40科目。農業実習授業は座学の倍以上の時間を費やしました。学外では有機農家や足尾銅山見学などの他、夏と秋に二週間の研修旅行が実施されました。その他朝の集会、コンサルテーションなどを加えると、研修は計2029時間に及びます。

問いかけから始まる

学びにおいて、今年度は質問が有効に活用された年でした。きっかけはある研修先で「まったく学びがなかった」という学生の感想でした。同行職員が「例年多くの学びをいただく方なのに、なぜ今年は学べなかったのか。どうすれば引き出せたのか」とハッパをかけました。結果は目覚ましく、シビアな質問が飛び交うようになりました。「長年有機農業を続けるあなたを駆り立てているものは何ですか」「農場経営における哲学とは」「あなたにとって土とはどんな存在ですか」「心の奥底で最も大切にしている価値は何ですか」「そもそも発展とは何なのか」彼らの質問は、時として思いもよぬ答えを引き出しました。彼らの真剣勝負に答えてくださった講師や見学先の方々に感謝いたします。

研修が終わったいま、今度は彼ら自身が答えを探さねばなりません。もう支えてくれるルームメイトも、プレッシャーをかける職員もいません。しかしこの9か月の記憶が、彼らを後押ししてくれるものと信じています。



教務主任

大柳 由紀子



特別講師

田坂興亜、村上真平、鎌田陽司、酒匂徹、山田祐彰、桑原衛、芳賀欣一、小倉恭子、甲斐田満智子、坂原辰男、田村修也、J・B・フォーバー、アルデンドウ・チャタジー、ジョセフ・小澤、ブーンソン・タントストン、全国友の会、県内友の会各支部、那須塩原警察署

農業関連見学・研修先

帰農志塾、ウィンドファミリー農場、金子美登・石川宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

夏期個人研修

自由学園農場、成澤増雄、丸山尚史、沼尾めぐみ、紫塚洋蘭園、エルム福祉会、なじみ庵、ゆいの里

見学先・交流団体

【栃木県】那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所）、渡瀬川遊水池、マ・メゾン光星、西那須野幼稚園、矢板幼稚園、槻沢小学校、波立小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、黒磯南高校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、鹿沼福音教会、松が峰カトリック教会、松原教会、氏家教会、栃木キリスト教会、足利教会、足利東教会、小山教会、上三川教会、圓光寺【東京都】日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会、目黒カトリック教会、早稲田教会【他府県】まぶね教会、桐生東部教会、渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会（板橋明治）、丸木美術館、ARISA（アジア学院サポーター）各位、各地ロータリークラブ

農村地域研修

【山形県置賜地区】渡部務・美佐子、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢蔵、高畠共生塾（遠藤周次）、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、J A山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー（佐藤恵子、原田加矢乃）、川西町役場（原田俊二町長・産業振興課）、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子【山形県戸沢村】戸沢村役場産業振興課地域づくり推進係、産業振興課、国際交流協会、芳賀欣一、神田地区、戸沢中学校【山形県庄内地区】加藤鉦一、月山パイロットファーム（相馬一広）、共立社鶴岡生協（佐藤誠一）、志藤正一、J A庄内たがわ営農農政課、荘内教会（矢沢俊彦）、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内協同ファーム、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、鶴岡市立加茂水族館、佐藤昌司、J A鶴岡西郷支所、茨新田生産組合、有限会社ドリームズファーム【秋田県仁賀保町】土田雄一、佐藤喜作、JAにかほ、にかほ市役所、曹洞宗太白院、渡前小学校、都市農村交流センター【岩手県】ウレシパモシリ自然農園（酒匂徹）

西日本研修旅行

【東京都】農村伝道神学校、立正佼成会【静岡県】聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍【大阪府】大阪南YMCA、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク（生田武志）、関西いのちの電話、希望が丘教会【熊本県】熊本いのちと土を考える会（高丸和彦）、エコネットみなまた・はんのうれん（大澤菜穂子）、水俣病資料館、川本愛一郎（証言者）、ほっとハウス【広島県】広島平和記念資料館、坪井直（証言者）、スティーブン・リーパー【三重県】愛農学園高等学校【岐阜県】永谷嘉規・香、中村満・真紀子、加藤優志、三浦大地、高谷裕一郎、伊藤和徳

見学・交流等、
研修でお世話にな
った方々
(順不同・敬称略)

study supporters

カリキュラム

curriculum

有機農業 実習

practical field
study

有機農業、畜産、
食品加工の論理的
および実践的知識の
習得を目的としている

【野菜作物】

ぼかし肥作り、
堆肥作り、土着菌の
採取と活用、天恵緑汁、
魚のアミノ酸資材、
水溶性カルシウム、
炭焼きと木酢作り、
籾殻くん炭、自家採種、
練り床を利用した苗作り

【畜産】

養豚(人工授精、出産、去勢)、
養鶏(育雛、人工ふ化)、養魚、
家畜衛生、飼料配合、
発酵飼料作り、発酵床式畜舎

【肉加工】

ソーセージ、ハム

農場管理 活動

field management
activity

グループによる農場管理

(野菜作物栽培、および畜産管理)

フードライフワーク

(自給自足のための農作業および給食準備)

グループリーダーシステム

その他の 研修

others

コミュニティ・ワーク(田植え、稲刈りなど)、
内的成長を促す活動(朝の集会、Growth File、
コンサルテーション、リフレクションペーパー、
振り返りの日)、

口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、
見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行、
ホームステイプログラムなど

【指導者論】

アジア学院の指導者論
サーバント・リーダーシップ
アジア学院の歴史と建学の精神
参加型農村調査法
自律学習
時間管理法
プレゼンテーション技術
ファシリテーション技術
人間開発論
プロジェクト立案法
ストレス管理法
宗教と農村生活
報告書作成指導

【開発論】

環境と開発
栄養と健康
共助組合論
ローカライゼーション
ジェンダー論
アジアの人身売買の問題
足尾銅山鉱毒事件と田中正造
那須疎水と西那須野開拓の歴史
開発への代替のアプローチ
開発と日本の歴史
気候変動と国際パートナーシップ
友の会の活動について

【持続可能な農業・技術】

持続可能な農業概論

有機農業

野菜・作物概論

SRI(稲集約栽培法)

畜産概論

作物病害虫管理

代替技術

化学農業の危険性

熱帯における自然農業

エコ・アジアにおける自然農業と活動

パーマカルチャー

アグロフォレストリー

生産者と消費者の提携

バイオガスワークショップ

立体農業の哲学

農業技術実習

畜産技術実習

肉加工実習

【日本語、日本文化】

研修時間総計：2,029 時間

大津 健一
荒川 朋子、大柳 由紀子
大津 健一
荒川 朋子、大柳 由紀子
大柳 由紀子
ティモティ・アパウ
大柳 由紀子
大柳 由紀子
ティモティ・アパウ
大柳 由紀子
ジョセフ・小澤*
ジョナサン・マッカーリー、バン・ヒョンウク、
ティモティ・アパウ
デービッド・マッキントッシュ

田坂 興亜* (アジア学院理事)
ザチボル・ラコー
遠藤 抱一
鎌田 陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
荒川 朋子
甲斐田 満智子* (国際こども権利センター)
坂原 辰男* (田中正造大学)
田村 修也*
J・B・フーパー*(アジア学院北米後援会 事務局長)
大柳 由紀子
J・B・フーパー*
全国友の会、県内友の会各支部

アルデンドウ・チャタジー*
(76年卒業・インド、農業アドバイザー)
荒川 治
荒川 治、上村 まゆ
ブーンソン・タントストン*
(エコ・アジアインパクトセンター農場主任)
ギルバート・ホガング、大谷 崇、
ティモティ・アパウ、バン・ヒョンウク
荒川 治、上村 まゆ
バン・ヒョンウク
田坂 興亜* (アジア学院理事)
村上 真平* (自然農法家)
ブーンソン・タントストン*
酒匂 徹* (有機農家)
山田 祐彰* (東京農工大学講師)
荒川 朋子
桑原 衛*(NPOふうど代表)
芳賀 欣一* (山形県戸沢村国際交流協会会長)
荒川 治、上村 まゆ
ギルバート・ホガング、大谷 崇、
ティモティ・アパウ、バン・ヒョンウク
大谷 崇、小出 秀夫*

小倉 恭子*

講義 一覧

lectures

*は特別講師

特別教育 プログラム

special education
programs



St.Olaf 大学(アメリカ・ミネソタ州) 1月プログラム「日本の環境の持続可能性」 アジア学院を拠点に開催

アジア学院の設立時からアジア学院と深いつながりのあるアメリカ・ミネソタ州の私立大学 St. Olaf 大学の1月プログラムが、アジア学院で実施された。参加学生20名、教師2名が3週間、アジア学院の日々の生活を基盤にしながらかつて授業や課題に取り組んだ。他大学のプログラムがこれほど長期に亘ってアジア学院で実施されたのは初めてのことであり、アジア学院カリキュラムの大学教育への応用、貢献の可能性を広げた。

プログラムの実施責任者であるキャサリン・テグメヤ・パク准教授(アジア研究、政治学)にプログラムが実施された経緯、また概要を報告してもらった。

「私が初めてアジア学院のことを聞いたのは、St. Olaf 大学で働くためにミネソタ州のノースフィールドに移ってわずか数週間の時だった。同大学の引退教授であるドン・ター先生が、日本について研究を行っている私のことを聞きつけて私を探して下さり、ター先生の親友である高見敏弘先生の作った驚くべき学校について話して下さったのだ。それから数年間、私はアジア学院のことを知る同僚(ディック・ボドマン教授、クリス・マックファーソン教授、クレイグ・ライス氏等)からアジア学院のことを更に知るようになった。彼等のおかげで2012年の夏に、学生の『平和と社会正義に関連する国際インターンシップ』の研修場所として、アジア学院がとても適した場所であることを思いついた。

2013年1月に短期で日本で教える機会があり、その時に私はついにアジア学院を訪問する機会を得た。その時私を受け入れて下さったステーブ・カッシングさん(元職員)と話し、その年の6~7月に St. Olaf 大学から3人の学生を前述のインターンとしてアジア学院に送る手はずが整った。またその時の話し合いで、カッシングさんは冬の間もアジア学院として何か協力ができるということを申し出てくれ、今回の「日本の環境の持続可能性」のプログラムの可能性が出てきたのだ。私はルース財団のアジア・環境研究助成を得て、2013年の6月にアジア学院に2回目の訪問を同僚のポール・ジャクソン教授と果たすことができた。職員の荒川さんと大柳さんと幾度にも亘る話し合いを続け、今回の1月プログラムの実施要項を組み立てていった。

この3週間の短い期間で、20名の学生、パメラ・マックドゥーエル学生監そして私の計22名は、アジア学院の学生たちが9ヶ月の間で訪れる研修先をめぐり訪問した。有機農家や元気のいい生協も訪ねた。日光の美しさに触れ、その一方で足尾銅山鉱毒事件の悲劇で失われたものの大きさを知った。鉱毒の流れる水の最終地である渡良瀬遊水地の中に残る旧谷中村跡を訪問してこの公害問題の複雑さとも対面した。20世紀初頭日本の政府によって足尾銅山からの鉱毒公害から東京への飲料水を守るため、この村を含む渡良瀬川下流域一体を鉱毒沈殿用の遊水地とすることで公害の広がりを防ごうとしたために、この村人たちは強制移住させられたのだ。福島大学の情熱的な教授からは、原発事故という悲劇的な人災に直面しながらも、なお強まる人間の回復力を証明していただいた。こうした学びの期間中、私たちはアジア学院でその使命である「共に生きるために」を実践する素晴らしい仲間と共に、農場での仕事に加わり、調理をし、掃除し、共に笑い、食を分かち合った。」

*このプログラムは2016年1月も開催される予定である。

Other Programs

その他のプログラム

上記プログラム以外にもアジア学院は国内外の様々なインターンシップや短期研修の場となっている。2014年度は次のプログラムが行われた。

青年海外協力隊 JOCV (18 人)、明治学院大インターン (2 人)、麦の会(2 人)(ミャンマー)、西アフリカの人達を支援する会(1 人)、(ギニアビサウ)、ウェズリー大インターン(1 人、米国)、セントオラフ大インターン(2 人、米国)、グローバル・ジャスティス・ボランティア(2 人、米国)、NPO 法人 APLA(2 人)、栃木県国際交流協会(2 人、マレーシア)、農村伝道神学校(1 人)

フード ライフ

foodlife



畜産担当

大谷 崇

畜産

livestock

養鶏部門

【鶏舎の改造】 鶏舎の改造は 2014 年 7 月から、二人のボランティア（英国聖公会のディック・ジョンソン牧師と横浜からの天野潤さん）の支援を得て始まりました。アジア学院

全体の新建築計画の中にはこの鶏舎改築は含まれていなかったため、養鶏担当者として自力で改造することを目標に掲げていましたが、独力で行うことは困難を極めていました。改良作業は多岐にわたりましたが、最終的には十分にやり遂げることができました。また、東京南ロータリークラブから資金援助を頂きましたことにも感謝申し上げます。

《改良点》

- ・ 太陽光を取り入れるため透明な屋根シートを設置
- ・ 雨漏り防止、及び積雪による屋根崩壊防止のための屋根の張替え
- ・ 落ち葉による堆積された部屋の中の放射能を除染し、更に 1 羽あたりの面積拡大
- ・ 換気システムの増加



この鶏舎改良で鶏へのストレスが減少し、その結果共食いが減少しました。また卵の出生率が増えました。

養豚部門

2014 年当初は繁殖用雌豚がたった 4 頭であったため肥育豚の頭数は例年よりも 10% 少ない 52 頭でした。しかし前年から全国的に発生した疾病の影響を受けている養豚農家が増加し、市場において豚肉の供給が足りないことなどの理由から、私たちの豚肉は市場価格と比較してやや高めです。また幸運なことに、家畜保健衛生所の定期検査においてアジア学院の豚たちから感染症は不検出でした。学院内コイノニアにおいても 12 月のトレーニングプログラム終了まで自家消費分を供給しました。学内外の消費者への安定供給を目指していましたが、豚の醗酵飼料の材料であるおからの供給先の地元の豆腐屋 2 件のうち 1 件が閉店してしまいました。今、私たちはおからの供給先をさがしていると同時に飼料用の大豆を自給することを視野に入れています。養豚はカリキュラムと有機農業には欠かせない大切な部門です。穀物、野菜栽培のためのバイオガス液体肥料を供給し、また家畜の餌を調理するメタンガスを得ることができる新しいバイオガスシステムを設置しました。しかし、新しい建物の調理場が未だ完成していないので、バイオガス装置に連結した調理用バーナーの使用までには至りませんでした。また農場の一部では継続して小麦や大豆などを家畜部門用に生産しています。我々は製品の品質とそして世界中の発展途上国からの農村指導者に実施している訓練の質を維持しながら、我々の農場と農場の生産物を使用して、ARI における家畜に完全に十分な飼料を供給することを目標にしています。

野菜
作物crops &
vegetables

現在アジア学院で栽培している野菜作物の放射能を測定すると、ほとんどが10Bq/kg以下となる。しかし、不耕起栽培と耕起栽培の野菜作物で

はセシウムの吸収量に違いが出る。不耕起の方が値が高くなるのである。例えば白米で言えば 2013 年度産の耕起玄米は 0.84 ~ 2.59Bq/kg (土は 562.12 ~ 605.2Bq/kg) であったのに対し、不耕起栽培玄米は、3.87 ~ 7.3Bq/kg (土は 1786.13Bq/kg) であった。このため 2014 年度は不耕起の田を耕すことにした。ところで、耕やしてみても驚いたのは、大量のオケラが土から出てきたことだった。次々と土から出てくるオケラを、これまた大量のカラスが啄ばみに来た。おそらく、1000 匹以上いたのではないかと。そして、田植え直前になると大量のアミミドロがびっしりと田一面を覆った。これを代かきの時に土に練りこんでから田植えをしたのだが、すぐにまたアミミドロが増殖し、他の雑草をほとんど全て抑えてしまった。アミミドロは分厚く 2cm 以上の層になり田に浮いていた。アミミドロの下に生えた雑草は、絡まれて倒され光を遮られて成長できなかったのだらう。もっと驚いたのは、田に浮かぶアミミドロから雑草が生えていたことだった。分厚い層になったアミミドロをまるで土にみたくてアミミドロに根を張り成長している雑草がいたのだ。7 月になるとアミミドロは黄土色に変わり始め、自然と姿が見えなくなり、この雑草も一緒に消えてしまった。アミミドロは分解されて稲の養分になったようで、稲の緑色が尋常でないくらい濃かった。明らかに窒素過多だと思われたが、反当り 11 俵も収穫できた。

放射能対策に耕したのだが、不耕起により地力が増進しているところへ、大量のオガクズ豚糞堆肥を散布(反当り 2545kg)したため、アミミドロが大発生したのだと思われる。明らかに他の田と稲の生育状況も形状も違い、窒素過多で病気が出る寸前であった。尚、耕した結果この田から収穫した玄米は 3.39Bq/kg(土 1357.04Bq/kg)となり放射能は減少したと考えられる。

田から教わる事が多く、自然の奥深さと人間の愚かさを痛感した稲作の一年であった。

2014
Achievements

フードライフ部門の功績

- ・山羊の飼育を開始し、ミルクの供給再開
- ・自給用飼料用小麦を 2.8t 収穫
- ・2 回代かきとアミミドロによる多の雑草抑制に成功
- ・除草のために 1 度も田に入ることなく、他の田よりも多く収穫
- ・飼料用カルシウムとして卵の殻や貝殻、豚や鶏の骨を使用
- ・豚小屋に道具を仕舞う棚などを設置、業務の効率化に貢献



給食

meal service

食べものを生産する人と調理の担い手に感謝をすること、全てのコミュニティメンバーが栄養バランスの取れた食事ができるという目標を掲げ、最良の方法で給食管理を行いました。

コミュニティメンバーの一番多い2014年4月～10月の7ヶ月間で、朝食、昼食、夕食を合わせて計約 31,248 食を給仕しましたが、予想していた通り学生たちの食習慣の違いは私たちの試練下となりました。しかし最終的には共同体の全員がお互いのやり方を尊重することを学びました。例えば食事制限のあるイスラム教徒と菜食主義の学生は自ら率先して調理当番の調整を行いました。

栄養学の授業では学院で育てた食べものについて理解を深めました。学生たちの自国の食べものについて考え、食を通じて地域の健康をどう向上できるか話し合いました。

過去数年、収穫したとうもろこしを調理に有効活用できていませんでしたが、カメルーンからの研究科生が給食調理に参加してくれたことで、とうもろこしを通常の献立に使用できるようになりました。アジア学院の給食担当として共同体のメンバーのためにとうもろこしの料理を作ってくれた彼女の惜しみない努力に感謝します。とうもろこしを主食とするアフリカ人の学生にとって郷土食を頂けることはなによりの喜びであったと思います。このような、アフリカやアジアの食習慣の混合はアジア学院ならではの特徴です。

給食担当は農場計画会議（以下 FMA）とリーダーの反省会（学生が2週間毎にリーダーを交代する際に行う）に出席します。給食担当が FMA やリーダー反省会に積極的に参加することで、農業と給食という異なる部門をつなぐアイデアを共有することができました。またリーダーの反省会は学生たちと信頼関係を築くもう一つの方法でありました。学生たちの多くが給食はカリキュラムの一環であり、大切なもの

2014 Yield

2014年度の主な農作物の生産量

crops & vegetables

野菜・作物

米
7,191 kg
(販売用含む)

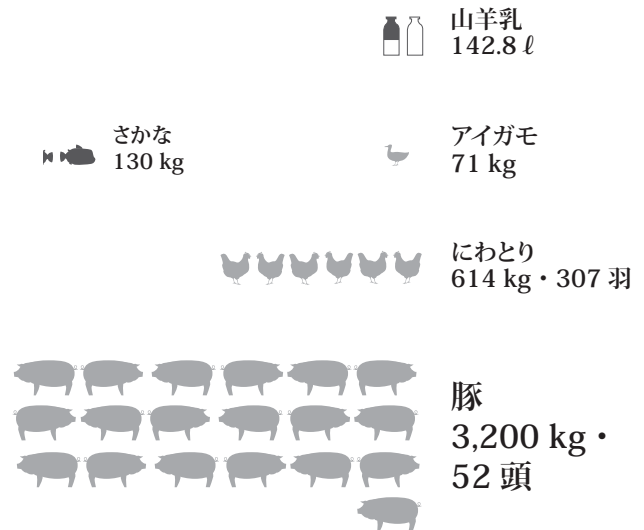
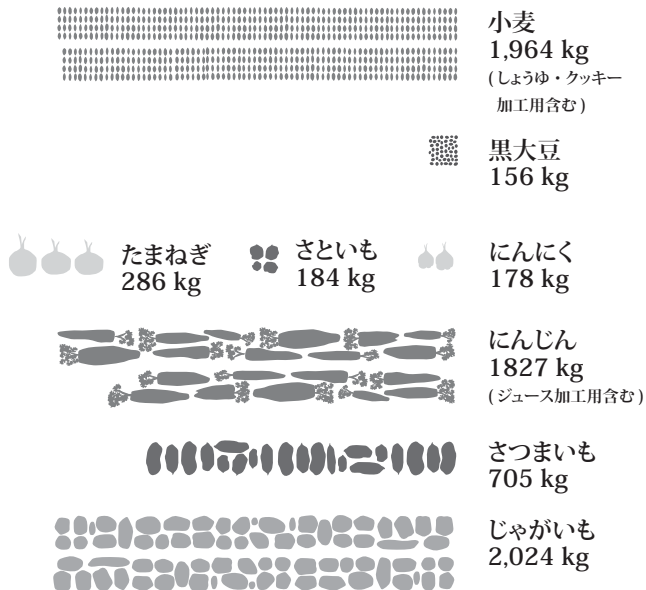
大豆
1,959 kg
(しょうゆ加工含む)

と認識し、学習の機会として真摯に受け止めていることがわかりました。給食活動は学生たちがリーダーシップを実践する場所でもあるのです。

常勤の給食スタッフの間で風通しの良い環境を実現し、話し合いの場をできるだけ多く設けることが私の要望でした。神のご加護によってメンバー全員が家族のようになり、お互いが違っていても各々に対して信頼と尊敬と愛情を持って接し、受容を経験することができました。調理に参加して下さった常勤の給食スタッフや通いのボランティアさん、2014年度の共同体の皆さんに特に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

コーディ
ネーター
ザチボル・
ラゴ





放射能 対策

radiation clean-up

学院の全ての収穫物は最初に収穫した時に必ず放射線を測定し、基準値を下回ったものは食堂で調理して出す、という規則を継続して厳しく守った。2014年9月現在、学院で収穫した食べ物の内37Bq/kgを超えているのは椎茸だけであった。椎茸のみ、2012年からCsの値が増加傾向にある(2013年261Bq/kg、2014年330Bq/kg)。

また、食材は調理するときによく洗う、椎茸は食べない、山菜、くりなど耕起されていない場所からの収穫物は、特に注意して測定してから食卓に供することなど心がけた。

堆肥は放射線量が減少してきているが2014年度値(713Bq/kg)が基準値の400Bq/kgを未だ下回っていないため、田畑からとれた大豆の殻、麦わら、稲わらなどを温床や堆肥として使用する方針である。魚の池の土も1185Bq/kgで基準値を超え、2013年より増加した(2013年856Bq/kg、2014年1185Bq/kg)。また、2014年女子寮の屋根工事の際、屋根にたまった落ち葉などが66,190Bq/kgもあった。2011年から測定してきたなかでも最高値であった。現在、屋根は張り替えられ周辺は除染された。

このような放射性物質は8,000Bq/kgを超える椎茸栽培用原木が置いてある学院内の杉林に集め、放射線を65%遮断する特性のフレコンに入れて保存している。

一方、豚舎の発酵床、ぼかしは基準値を下回り、温床の腐葉土は、2014年410.96Bq/kgまで下がった。温床踏み床に針葉樹の葉は使用しない、学院内の広葉樹の葉も温床には使用しないようにし、2013年堆肥置き場をトタンなどで囲い込み外から針葉樹の葉が入らないようにした。また、有機肥料(カリウムを含む)を施肥し、バイオガス液肥貯水槽、養魚池の底を掃除した。さらに、周りから土などが流れ込まないようにする必要がある。

ABC

アジア学院ベクレルセンター(ABC)

震災から3年が経過し、ABCでは外部からの検体数がやや減少傾向であるが、野山で採れたキノコや山菜を中心として、国の基準である100Bq/kgを大幅に越えるものがあり、これらは必ず測定してから食べようと、啓蒙活動を行ってきた。昨年同様アジア学院の収穫物や、各所の田畑の土の放射能とペーパーの測定を行っている。

・4月19日 小出裕章先生の講演会での前座で、測定ボランティアが栃木県北の汚染状況について発表を行った。

・6月9日 栃木県北集団ADR(原子力損害賠償紛争解決)がキックオフされた。その事務局をABCに置いている。この地域の住民は、みんな放射能汚染の被害者だと言う認識で、キックオフの集会には、120名を超える人々が参加した。

・10月11日~12日 アジア学院収穫感謝の日。DVDによるADRについての説明とABCの2年半の測定データ資料の販売を行った。

・12月25日 栃木県北集団ADRの参加申込が締め切られ、集計の結果、約2300世帯の約7300名が参加することになった。

・1月31日 ABC及び那須塩原市の測定開始からの3年間のベクレル全データが完成しました。また2月28日には、3年間にABCに来店した人数・測定数・産地別のデータの分析などを追加し、300円で販売している。

アジア学院ベクレルセンターのHP:

<http://www.ari-edu.org/blog-events/ベクレルセンター/>



「ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。

三つよりの糸は切れにくい。」

コヘレトの言葉 4章12節

2014年度、アジア学院のコミュニティは深い根を伸ばし、様々な試練を乗り越えました。研修のための最後の建物が完成し、新しい学びの環境と雰囲気慣れはじめました。鶏のと殺場が新しくなり、豚小屋につながるバイオガスプラントが少しずつ動き始めました。そしてオikos・チャペルが完成しました。オikosというのは家族や家という意味があります。建物は築110年の地元の古民家を使用しました。木造古民家の歴史に包まれて、アジア学院の創立記念日の9月16日に献堂式を行いました。大勢のお客様と共に喜びを分かち合うことができました。これからも私たちのコミュニティの心の中心として大切にしていきたいと願っています。

互いに愛し合うことも2014年度のコミュニティの大きな学びで



した。エボラ出血熱が西アフリカで発生したというニュースを聞いて、私たちは西アフリカのリベリアからの学生たちと抱き合いました。リベリアからの3人の学生のために祈り、話を聞き、また共に泣きました。そしてその学生たちとまた西アフリカで活動している卒業生のために様々な形で支援をしました。多様な混乱を経験しながら、それでも私たちは共に生きることを選び、そしてそのことに感謝しています。3人のリベリアの学生たちが卒業して自分の国に戻って活動を始めることが出来たことを神様に心から感謝しています。

アジア学院の存在はこの那須塩原地域で知られるようになりました。特に2014年度の西那須野ふれあい祭りでアジア学院のダンス・チームはクリエイティブ賞を受賞しました。またアジア学院のゴスペル・クワイヤー MINNGOS も地域とのつながりを更に深めました。那須塩原地域以外の学校、教会、地域の方々との関係も深くなっているという実感があります。教会にアジア学院の学生を呼んで共に礼拝をまもっていただくアジア学院サンデーの数も増えました。新しく群馬県の教会でもアジア学院サンデーを持っていただくことができ、神様がこの学校の働きを通して何をなさろうとしているかということの証を何度もすることが出来ました。

2014年度の終わりが近づいてきて、やっとアジア学院のキャンパスは本来の形になってきた気がします。新しい建物がどんどん増えてきた中で私たちもいろいろな変化を感じました。つまりやっと私たちのホームが出来たという思いです。これからも神様の恵みと導きを求め、私たちの使命をしっかりと持ちながら前向きに歩んで生きたいと思えます。皆様も一緒に祈りながら歩んで生きましょう！

2011年の震災でアジア学院にあったバスケット・ゴールがなくなりました。2014年の収穫感謝の日の収益で新しいゴールを手に入れることが出来ました！アジア学院のドリーム・チームがまた生まれる！ YEAH!

2014
Achievement

卒業生 活動

graduate activities

学生募集

2014年度は27名の研修生、3名の研究科生を受け入れました。今年度から研修生は、研修期間中に3回、自分の送り出し団体へ報告をすることが義務づけられました。これは、送り出し団体との関係

の深化と、卒業後の活動をよりスムーズにすること等のための試みです。2013年、アジア学院は創立40周年を迎えました。支援者に記念冊子(12ページ)を作成・送付しました。

卒業生ネットワーク

卒業生と定期的にコミュニケーションをとっています。Mail Chimp というメールソフトを使い卒業生に毎月ニュースレターを送っています。以前には年に4~5回ニュースレターを郵便で送っていましたが、現在は、比べ物にならないほど容易にアジア学院のようすを卒業生にお知らせすることができるようになりました。卒業生には加えて『NETWORK Bulletin』を春/夏号、秋/冬号として年2回届けています。私たちは卒業生に彼らの活動や、国や、ほかの卒業生に影響を及ぼすような地球規模の問題につ

学生募集・
卒業生ネット
ワーク担当
キャシー・
フローディ

■ 2004年度卒業生のティル・クマリ・プンと藤井牧人が5月にアジア学院に訪問した。二人はネパールで活躍している。



いてさらに詳しい寄稿をお願いしてきました。

毎年、アジア学院は卒業生訪問をしています。今年は4月から5月にかけてミャンマーを訪問し、アジア学院卒業生同窓会の会合に参加し、また卒業生を訪問しました。ヤンゴン、アイヤルワディ、マングレイ、カヤ、シャン、サガイン、チン、カチンの8州の28名の卒業生たちと会うことができました。



Graduate
Reports
2014

Dorcas Noble Fund (DNF) という所属団体では有機栽培法に関する体験プログラムやワークショップを通して農家を訓練する役割を担っています。DNFでの活動に加え、カリンは個人的に試験農場を整備しています。様々な地域から人々が訪れ、そこで学んでいます。また、Uipo Naui Inlam (UNI) でボランティア活動もしています。UNIはカリンの部族会に属する女性団体で、地域イベントや法的代理業務を行いながら、コイブ族のアイデンティティや文化を守る活動をしています。

インド) カリン・トシャン 2007年卒

「2007年に酒匂徹さんから地下水源を示す方法を教わりました。マニプール州は飲み水不足に直面しています。人々は自宅から5~6km離れた場所で水を探します。時には更に遠くまで行きます。アジア学院で学んだことは共同体のニーズを満たし、特に生活に不可欠な『飲み水』を得ることで、マニプール州に利益や成功を大いにもたらします。3つの地区で、75の水源地が見つかり、井戸として利用されています。」

カリンは共同体で農家や女性と共に活動しています。

「私たちが有毒化学物質を使用することの危険性について知らせないと、人々は農業に興味を持ちません。農業は貧しい人々の仕事だと感じているからです。私はここから訓練を始めます。有毒化学物質について知ると、人々は自分自身で農場を作ろうと決心します。販売用に栽培された作物には化学物質が多く含まれているので、それらを食べると死んでしまうと感じます。早死にしたくないと思うので、自分たちで化学物質を使わない農業を始めるのです。農家にとって最も重要な事は『まず考えて、それから行動する』ことです。これは私たちの共同体の農家や消費者にとって適切な教えです。」

研修 評価

program evaluation

フェッツァー研究所助成 アジア学院研修評価 (2013～2015年)

アジア学院の四十数年の研修事業の歴史において、外部の方による客観的な研修評価をすべきだという声はこれまで度々あったが、それは一度も果たされることがなかった。しかし創立40周年を目前にその機会を模索していたところ、上智大学のリチャード・ガードナー教授がフェッツァー研究所 (Fetzer Institute アメリカ合衆国ミシガン州カラマズー市) の研究事業としてアジア学院の評価事業を推薦して下さり、それが2012年に採択される見通しとなった。フェッツァー研究所は2012年から「愛と赦しを実行した模範となる存在を特定し、成功例を考察し、そこから学び、個人やコミュニティや組織のためになる良い事例」を募集していたのだ。やがて評価事業コーディネーターとして日本在住のNGO/NPO コンサルタントのセラジーン・ロッシトー氏と巡りあうことによって、2013年4月にこの調査がフェッツァー研究所とアジア学院との共同プロジェクトとして正式に実施されることとなった。ロッシトー氏の他、東京在住の2名の大学院生であったリゼット・ロブレス氏とジョン・リクテン氏が助手として加わり、上智大学のリチャード・ガードナー教授とデヴィッド・スレイター准教授にアドバイザーとして協力を頂いた。調査期間は助成が正式に決まる前の半年間の事前準備期間を含めると2年間に及んだ。

本評価事業は、学院の研修の評価をするという目的を果たしただけでなく、そのプロセス自体が現役学生、卒業生、職員(卒業生で職員になっている者を含む)の話や意見を集める特別な機会となった。また調査結果をいかにまとめていくかを話し合う過程においては、アジア学院の目標、影響、そして未来について話し合い、振り返ることができた。更に学

生募集や選考過程、カリキュラム内容、学習内容とその利用法、日常的な諸問題等に関して今回得られた様々な意見は、アジア学院の今後の組織発展及び研修プログラムの開発に大いに活用されていくことと思う。

データ源と情報収集について

本事業では、2013年4月から2014年4月にかけて、計37カ国出身の約300名の卒業生、現役生、現職員、元職員に対する聞き取り調査、アンケート、現場訪問、及び文献調査からデータ収集を行った。

A. 現役生からのデータ収集

- ・2013年プログラム参加者(現役生)の聞き取り調査(31名。2013年4月、7月、11月)
- ・2008～2012年の学生の文献調査(90名以上。2014年2～5月)

B. 卒業生からのデータ収集

- ・卒業生へのアンケート調査: 69名。2014年9月～10月
- ・40周年記念事業で来日した卒業生の聞き取り調査: 43名。2014年9月
- ・卒業生の聞き取り調査: 35名。2014年10月～12月
- ・現地訪問聞き取り調査: 36名。2014年1月スリランカ現地訪問、2014年4月フィリピン現地訪問

C. 職員からのデータ収集

- ・職員の聞き取り調査(19名。2014年2月～4月)
- ・ソフトデータ(定性的情報等)検証



■ スリランカの卒業生レヌカ・パドラカンティ(左)の活動現場を訪れる評価事業コーディネーター、セラジーン・ロッシトー(右から2番目)とアジア学院学生募集担当のキャシー・フローディ(左から1番目)。(2014年)



■ 評価のために集い、活動を発表するフィリピンの卒業生たち(2014年)

■ 上智大学での結果発表会（2015年）



データ収集における焦点

- ① アジア学院研修への参加動機(個人及び送り出し団体)
- ② カリキュラムについてのフィードバック
 1. 何を学んだか
 2. 実行に移せる学びとは何か
 3. アジア学院の研修について追加あるいは変更すべき点
- ③ 学びについて⇒実際に学んだことは何か。振り返ってみて学びたかったことは何か。
- ④ 個々人の内的変化について一考え方や行動をどのように変えたのか
- ⑤ プログラムの影響⇒影響と変化
 1. 帰国後に実行に移せたもの、移せなかったもの
 2. 組織・地域社会内での働き、組織・地域社会への影響及び社会の変化
- ⑥ 本国での知識・技術・価値の応用と継承
- ⑦ アジア学院の課題—組織運営プロセス、個人的な問題
- ⑧ 帰国後の課題—学びの活かし方、所属する組織内での課題
- ⑨ 参加者の選考・募集に関するフィードバック
 1. 研修期間に関するフィードバック
 2. どのような参加者が選考されるべきかに関するフィードバック
 3. 卒業生アウトリーチとネットワーク形成
- ⑩ アジア学院とのコミュニケーションと関係作りについて（ニュースレター、ネットワーク、同窓会、アジア学院の今後に関する質問を含む）

調査結果のまとめ

調査結果は、膨大な量のデータが以下のカテゴリーで分析され考察されて導かれている。

- ① 参加動機：アジア学院を選んだ理由
- ② アジア学院の研修プログラムの影響：学生への影響と卒業生への影響
- ③ 帰国後に卒業生が直面する課題
- ④ 卒業生たちの事例ストーリー
- ⑤ 募集および選考方法

それぞれのカテゴリーでの考察はレポートに詳しいが、総括的にこの調査から明らかになったことは、アジア学院の研修が焦点を置いている、人に仕える指導の手法、食と命の繋がり、コミュニティづくりの方法のいずれもが、学生、職員、卒業生を問わず、それぞれの個人の内的な変容に影響を与え、それぞれの行動様式と活動に大きな変化と意味を与えているということであった。またアジア学院の研修が社会正義的な価値観に根ざしているという特徴を挙げて、それが卒業生の活動の影響力、継続力を強めているとしている。卒業生の事例のまとめには「社会正義の価値観を

目標とし、虐げられた人々と共に働くという卒業生たちの献身が、長期的により深い影響をもたらしている。また、アジア学院での学びが、ひとたび組織や地域社会に伝達されると、人々はライフスタイルや環境の持続可能性を考えて包括的な参加型の地域社会づくりに焦点を定めるようになる。それがより多くの機会や生活の質の向上をもたらしており、地域レベルで生まれる変化は、本研修プログラムが価値観の変革を促進していることを示している。」とある。そしてレポートの最後の考察では「アジア学院が技術取得だけでなく社会正義的価値観に影響を及ぼしていることの重要性が示されることで、他の研修プログラムの模範ともなり得ると思う。」と結んでいる。

このことから、これまでアジア学院が内部評価においていわば主観的に評価してきた研修の意義や成果が、外部評価においても同じような評価を得たことになる。これはこれまでアジア学院の研修の意義を信じて献身してきた多くの職員達や関係者の大きな励みとなるばかりでなく、これまで注がれてきた様々な支援が、その目的と意図と外れていないところで活用されてきたことが証明されたという意味で大きな意味がある。

一方でこの評価はアジア学院の課題も指摘した。「世界の変化と共に、アジア学院でも、草の根指導者が 21 世紀のニーズや状況や課題に直接的に対処して、地域の問題に対して持続可能な解決策を講じる力をつけるように変わっていかなくてはならない。」と課題を挙げ、「研修において、地域コミュニティがいかにグローバルな意志決定者の行動の影響を受け、地域の状況がいかに土地管理、資源不均衡、多国籍企業支配、災害、政情不安などの問題と関連しているのかが指摘されれば、アジア学院の影響力と卒業生が地域にもたらすインパクトも増すであろう。」としている。この提案は今後のカリキュラム構成に取り入れていきたい。

また「アジア学院が草の根指導者同士の橋渡しをしていくためには、往々にして不足しがちな人材、技術、資金、時間の投資が必要である。」との組織運営に関する言及もあった。これは中長期的な戦略を必要とすることであり、理事会と職員会が一体となって取り組む課題であろう。



「草の根の架け橋」 調査結果の 一般向け冊子

日英両言語で作成された報告書(32頁、日英別刷り)は、ご希望の方に送料込み 500 円でお送りいたします。

学院事務局までご連絡ください。

アジア学院 HP からダウンロードできます。

url: <http://www.ari-edu.org/2015/06/18/graduatestudy-report-download/>

国内 事業

domestic business



① アジア学院でのイベント

5月 イングリッシュ・ファーム

アジア学院の強みである、多様性、フードライフを英語で体験できる3日間。今回も昨年度に引き続き『お米』をテーマに開催された。アメリカ人ボランティアと共に、田植え前の準備や、東北インドのカレーやチャパティ作りを行った。15名の参加者（内2名は部分参加）と共に充実した3日間となった。

1月 イングリッシュ・バイブルキャンプ

アジア学院での自給自足の生活は、キリスト教精神に深く根付いている。今年で2回目となったバイブルキャンプでは、「成長～Growth～聖書にはどう書いてあるの?」というテーマのもと、アジア学院の生活を体験しながら聖書について参加者(5名)の皆さんとともに考える時となった。

6月、10月 古本・古着市

アジア学院古本市を初めてから5年目を迎えた。6月には約240名、10月には約150名の来場者を与えられ、少しずつ地域の方々にも広まっているのを感じる。那須セミナーハウスの落ち着いた雰囲気の中で、皆さまが送って下さる本を手にとり有意義な時間を過ごして頂いている。

6月 企業研修(栃木県経済同友会)

栃木県経済同友会のご協力により、初めて企業研修を開催することができた。有機農業体験や異文化体験を土台に、アジア学院の研修の柱である「サーバント・リーダーシップ」の講義の他、世界の経済の現状を体験する貿易ゲームをしたり、アフリカの卒業生による「グローバリゼーション～アフリカの現状～」のセッションに参加をする等、世界について考え、自分自身を振り返る時間を持って頂いた。

10月 Asian Development Bank(アジア開発銀行)

アジア開発銀行農業担当グループ主催のプログラムを受託し、大メコン圏6か国の農業担当行政官18名をお迎えした。アジア学院の取組に加え、栃木県東北地域の農業の実態、特に気候変動に対応した農業の試みを視察した。

② アジア学院外でのイベント

11月 西日本キャラバン『健康って?』

開催6年目になった。今年度は研究科生で2008年度卒業生のセオドラさん(カメルーン出身)が自国でのコミュニティナースの経験を元に、「健康とは?」というテーマで各地を回った。2名の日本人の卒業生インターンも途中から同行し、彼らのアジア学院での体験を多くの方々と分かち合ってもらえた。訪問先は37団体。大学や教会が多く、若者やまた長年の支援者やまた新しい方々と「健康であるということは何か」ということを共に深めることができた。

③ 那須セミナーハウス

ワーキングビジター (130人)

震災前と比較しても多い人数の方々国内外から来て頂くことができた。ワーキングビジターの経験は参加者に新たな考えや行動の機会を与えることができると実感した。

スタディーキャンプ (43団体 554名)

Foodlifeや国際協力を知るために、貿易ゲーム、アジア学院の食材を使ったバーベキュー、外国人職員やアジア学院学生との話し合いを行った。参加者の評価は今年も9割以上の方が「5(非常に満足)」をつけた。

県内学校交流プログラム

県内の学校に赴き、国際交流を通して学生さんたちとの国際理解の一助となることができた。特に市内の波立小学校では10数回にわたり訪問事業を行い、5・6年生の児童が協力し合って通訳なしでコミュニケーションがとれるまでになった。

訪問先：西那須野幼稚園、矢板幼稚園、那須塩原市立槻沢小学校、
那須塩原市立波立小学校、大田原市立黒羽中学校、栃木県立宇都宮北高校、
栃木県立宇都宮女子高校、栃木県立黒磯南高校

キャンプ 参加団体

UCCカナダ(カナダ)、Olathe高校(アメリカ)、宇都宮大学重田ゼミ、栃木県経済同友会、非電化工房、日本基督教団代田教会、明治学院大学齋藤ゼミ、立教大学甲斐田ゼミ、新島学園高校、共愛学園高校、聖隷クリストファー中学校、明治大学寺田ゼミ、つくばキリスト教活動、勝山学園、立教大学YMCA、清泉女子大学、中央大学、そらまめキッズアドベンチャー、つくば東京教会、同志社大学、青山学院大学ジャンティジャンティ、聖心女子大学永田ゼミ、関西学院高校、桜美林大学、ルーテル学院大学、明治学院大学頼ゼミ、日本基督教団日立教会、東京都立深川高校OG、キリスト教学生友愛会、神戸ユニオン教会、日本基督教団関東教区SC



サポーター 活動報告

activities with
supporters

アジア学院 北米後援会 afari

財務報告

アジア学院北米後援会 (AFARI) は 2014 年度 \$136,668.27 をアジア学院に送ることができた。

うち \$104,518.00 を現金で、残り \$32,150.27 を現金以外の形で支援した。現金以外の支援というのは、アジア学院に代わってアメリカ国内で行った印刷、発送などの費用である。昨年度より現金は \$42,918 増え、非現金は \$8,405 増えた。

現金寄付がこれだけ増えたのには主に3つの要素がある。ひとつは贈与である。これが増加分の約 40% を占める。2つ目は、しばらく寄付を休んでいた方々が寄付を再開してくださったことである。これは増加分の約 40% である。3つ目は合同メソジスト教会の Advance Giving Tuesday というプログラムに AFARI が参加したことによる増加である。これが残りの 20% である。

報告会と理事

AFARI の事務局長の J.B.Hoover 氏がアメリカ北東部において3週間に亘る報告会をザンビアの卒業生の Judith Dakha と共に行った。報告会では多くの個人の支援者や支援団体と会い、また新しいグループにアジア学院を紹介した。また JB は AFARI の毎年恒例のイベントとして、トレイル・マラソン (舗装されていない主に山などの自然の中を走るマラソン) に参加し、\$11,291 を集めた。これは「完走すれば寄付を出す」と約束する人を競技前から募集する方法で集められた募金である。

Pam Hasegawa氏が10年間に亘る理事長職を終えたが、現在も理事

として残っている。新しい理事長として Margaret Hofmeister 牧師が選ばれた。Rod Booth 氏が理事を6年間務めた後 (その内の4年は副理事長)、昇天した。そして Ellen Palmer Marsey 牧師が副理事長に選出された。

アジア学院 サポーター の会 arisa

7月 アジア学院サポーターの集い

第2回アジア学院サポーターの集いが7月05日 (土) に開催され、35名の参加者の方と共に有意義

な話し合い、交流がもてました。

「サポーターの方が気軽に来やすい場所を作れないか?」「サロンのようなお茶を飲めるような場所があれば良いのではないか?」「サポーターによるキャンパスツアーができるのではないか?」「田植えやじゃがいもの収穫など、サポーターが参加できるようなイベントがもっとあると良いのでは?」「ホームページにイベントカレンダーを掲載したらどうか?」等、様々な意見がでた。

10月 収穫感謝の日 (HTC) ARISA バザー

今年は1週間前からの準備から多くの方が参加してくださり、皆さまが積極的にお手伝いして下さったのが印象的でした。昨年に引き続き、一品寄付バザー会場には、「あなたの買物が未来の農村リーダーをサポート!」というスローガンを掲げ、お買物とアジア学院のつながりをアピールすることができました。恒例のパナナトロン、サツマ芋フライ、マスの塩焼きなどと共に売り上げを伸ばし、アジア学院学生の奨学金のための収益は771,917円となりました。

④ 販売活動

2014年度の総売上額は2013年度を上回り (+553,651円)、また経費増加や設備の拡充などがなかったことから、利益の面でも例年に比べ学院の運営により貢献することができた。一方、下半期は豚肉や卵、フィリピンコーヒーなど需要に対し供給が追い付かなかった時期があったが、それ以外の商品については、各担当部署との綿密な連携が功を奏し、安定した販売活動を実施することができた。生産から販売促進、発送や配達、売上分析など多岐にわたる業務を、各職員・ボランティアとの協働によって、予定通り遂行することができた。関係者の協力を心から感謝すると共に、特に農場関係職員に「より安定した学院運営のために自家農産物を販売するという自助努力を行う」という意識が高まったことは販売部の存在する意義を顧みる上で大きな励みとなった。毎月行われる農場(生産者)と給食(消費者)、販

売(収入創出)の三者で行うミーティングでは、学内の需要と供給の調整だけでなく、教育活動の余剰生産物をどう利益に転換するかというアイデアを生み出す場となった。

また、バザーやマルシェなど約90件の学院外での販売の機会に恵まれ、アジア学院の広報はもちろん、消費者の方や生産者および販売者の方々との有意義な交流や意見交換ができた。普段お会いすることができない支援者の方と顔を合わせてお話しすることは、販売部の重要な役割であり、また楽しみでもある。

収入創出を意識しつつも無理のない生産計画を検討し、また新しいアイデアを柔軟に取り入れながら、既存の活動を少しずつ発展させることで、今後も継続して学院運営の一助となることを目指していきたい。

アジア学院の コミュニティ メンバー

community
members

職員

名誉学院長

高見 敏弘

専任職員

大津 健一	校長
荒川 朋子	副校長・事務局長
荒川 治	教育部長・農場長
大柳 由紀子	教務主任
バン・ヒョンウク	共同体生活
ティモティ・B・アバウ	共同体生活
ジョナサン・マッカーリー	共同体生活
デービッド・マッキントッシュ	国際関係
ギルバート・ホガング	畜産
上村 真由	野菜・作物
大谷 崇	畜産
ザチボル・ラコー	給食
キャシー・フローディ	学生募集、卒業生アウトリーチ
佐久間 郁	募金・国内事業
佐藤 裕美	販売・庶務・広報
山下 崇	外部プログラム・ 那須セミナーハウス主事

非常勤職員

君嶋 満恵	会計
齋藤 美紀 (14年4月~10月)	庶務
荒井 興柱 (14年12月~)	庶務
田中 順子	図書
直井 由美子	給食
福島 昌代	食品加工

嘱託職員

遠藤 抱一	法人財務室長
藤嶋 トーマス 逸生	広報

理事長

大津 健一 アジア農村指導者養成専門学校校長

副理事長

遠藤 抱一 アジア学院 法人財務室長

理事

福田 龍介	東京ユニオンチャーチ役員
興石 勇	前日本キリスト教協議会議長・ 日本聖公会志木聖母教会司祭
門脇 英晴	(株)日本総合研究所特別顧問
久世 了	前(学)明治学院学院長
星野 正興	日本基督教団松崎教会牧師
佐藤 範明	読売新聞那須塩原支局担当
田坂 興亜	元アジア学院 理事長・校長
飯沼 淳子	那須友の会

監事

大屋 秀之 (7月昇天)	矢板学園矢板幼稚園事務長
渋井 正明	元(株)渡辺美智雄経営センター部長

役員

興石 勇	前日本キリスト教協議会議長・ 日本聖公会志木聖母教会司祭
福田 龍介	東京ユニオンチャーチ役員
久世 了	前(学)明治学院学院長
星野 正興	日本基督教団松崎教会牧師
門脇 英晴	(株)日本総合研究所特別顧問
山根 正彦	(学)香川栄養学園理事・総務部長
菊地 功	カトリック新潟教区司教
福本 光夫	(学)西那須野学園理事長・(社福)しらゆり会理事長
宮崎 幸雄	(財)日本YMCA同盟名誉主事
山本 俊正	(学)関西学院大学教授
李 秀夫	(株)インテック代表取締役
菅野 勝久	日本基督教団西那須野教会牧師
飯沼 淳子	那須友の会
山口 和枝	全国友の会中央部
石川 宗朗	霜里農場
長嶋 清	元アジア学院職員
米田 ミチル	聖母訪問会総長
荒川 朋子	副校長・事務局長
遠藤 抱一	法人財務室長
荒川 治	教育部長・農場長
佐久間 郁	募金・国内事業課長

評議員

ボラン ティア

長期ボランティア

三輪 恵愛	国内事業部
ジェシー・ルジカ	給食
ショーン・ブラウン	農場
ターナー・リッチー	学生選考・卒業生ネットワーク
メリー・メグ・ガストン	学生選考・卒業生ネットワーク
上原 野亜	農場
中山 紀子	国内事業部
津布久 翔馬	農場
角 雄介	農場
カイ・メラディス	那須セミナーハウス
クララ・キアシュ	農場
坂田 有実	給食
ジョセフ・アンダーソン	農場

通いのボランティア

伏見 卓	営繕	渡邊 剛	野菜・作物
小野崎 仁	営繕	塚本 和史	給食
高村 京子	給食、食品加工、 総務	田中 正己	野菜・作物(油絞り)
鈴木 由美	総務(データベース)	矢嶋 由紀子	翻訳
鄭 鏡海	総務、プティーク	畠澤 昌枝	国内事業
マッカーリー 里美	給食、食品加工	柏谷 重明	国内事業
伊藤 正	農場	池田 小夏	国内事業
佐原 市郎	事務	堀口 紀江	国内事業
久保 瞳	給食	西野 順子	国内事業
平山 隆	営繕		
藤本 和子	給食		
川村 麦	給食		
林田 綾子	総務(医療)		
児玉 尚子	野菜・作物		
阿久津 泉治	野菜・作物		
木村 裕子	給食、学生選考、 総務		

ABC ボランティア

西川 峰城
高嶋 幸雄
阿久 津隆
藤本 涉平
早坂 孝行

■ 学生と国内サポーターが
 出会うイベント「Lunch in
 Tokyo」(7月)



国内

支援者・ 支援団体 一覧

donors

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

神戸ユニオンチャーチ
 神戸ヤングライフ
 国際基督教大学教会
 韓国語礼拝
 横浜ユニオン教会
 (カ) 援助修道会
 (カ) 大田原教会
 (パ同) 東京平和教会
 日本基督教団
 (教) 阿佐ヶ谷教会
 (教) 全国教会婦人会連合
 (教) 西那須野教会
 (教) 早稲田教会
 (公) 聖アンデレ教会
 (公) 聖オルバン教会
 (公) 東京聖三一教会
 (公) 東京教区 (19 教会)

奨学金

一般財団法人 アジア農村交流協会
 アメリカンスクール・インジャパン
 カチン平和教会 KCPC
 公益社団法人栃木県経済同友会
 東京霞ヶ関ライオンズクラブ
 日本キリスト教協議会
 日本福音ルーテル社団
 (カ) サレジオ修道会
 (カ) 聖心会 (あけの星修道院)
 (カ) 聖母訪問会
 (公) 東京聖テモテ教会
 聖テモテ奉仕奨学金委員会
 (公財) ウェスレー財団
 (財) 大阪コミュニティ財団
 (財) 新倉会
 (社) 東京アメリカンクラブ

諸団体

IKE 設計開発事務所
 SUPA 西アフリカの人達を支援する会
 アリサン (有)
 一般社団法人 I B S 社団
 宇都宮 90 ロータークラブ
 草の根ネット麦の会
 公益信託アジア・コミュニティ・
 トラスト (ACT)
 全国友の会中央部
 東京南ロータリークラブ
 那須友の会
 光陽電気工事
 横浜友の会
 ワールドファミリー基金
 わかちあいプロジェクト
 (医社) サマリヤ会
 (株) 鳥ネットワーク
 (公財) あしぎん国際交流財団
 (公財) ウェスレー財団
 (公財) 全国友の会振興財団
 (宗) 立正佼成会 那須教会
 (特活) WE21 ジャパンたま
 (特活) 国際協力 NGO センター

学校

栃木県立宇都宮北高等学校
 (学) 青山学院中高等部
 (学) 大阪星光学院中・高等学校
 (学) 共愛学園中学校・高等学校
 (学) 恵泉女学園大学キリスト教センター
 (学) さつき幼稚園
 (学) 女子学院
 (学) 清和学園 清和女子中高等学校
 (学) 明治学院
 (学) 明治学院中学校・東村山高校

海外

教会関係

米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 Global Ministries of the United Church of Christ and the
 Christian Church (Disciples of Church) - Common Global
 Ministry Board
 カナダ合同教会 The United Church of Canada

諸団体

アジア学院北米後援会 (AFARI)

奨学金

カナダ合同教会 The United Church of Canada
 合同メソジスト教会救援委員会 The United Methodist
 Committee on Relief
 合同メソジスト教会世界宣教 The United Methodist Church -
 General Board for Global Ministries
 アメリカ福音ルーテル教会 Evangelical Lutheran Church of
 America
 世界教会協議会 World Council of Churches

災害復興募金

合同メソジスト教会救援委員会 The United Methodist
 Committee on Relief

研究助成

米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 Global Ministries of the United Church of Christ and the
 Christian Church (Disciples of Church) - Common Global
 Ministry Board
 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 Global Ministries of the United Church - General Board
 for Global Ministries
 フェツァー研究所 Fetzer Institute

消費収支 計算書

statement of
financial activities

2014/4/1
～2015/3/31

会計 報告

finances

消費収入の部

(単位：円)

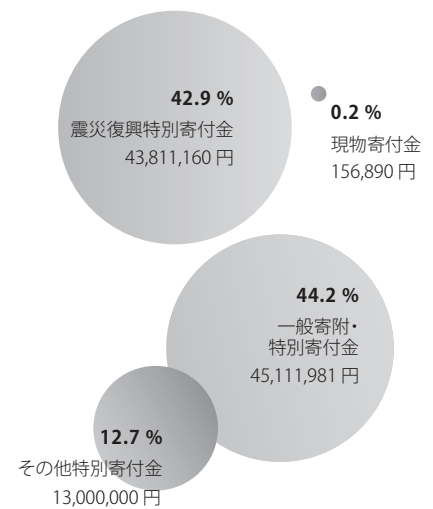
	2014 年予算	2014 年決算	2015 年予算
学生生徒等納付金 (*1)	35,742,539	33,203,112	53,964,520
授業料	2,938,000	2,531,000	4,352,863
入学金	373,750	147,000	495,137
食事費	792,000	769,500	882,000
施設設備資金	792,000	769,500	882,000
国内団体学費指定寄付金	16,332,000	14,340,600	14,708,000
海外団体学費指定寄付金	11,660,000	13,912,514	29,577,820
渡航費	2,854,789	732,998	3,066,700
手数料	12,000	20,500	22,000
寄付金	112,620,000	102,080,031	44,850,000
国内国外一般寄付金	46,620,000	45,111,981	41,850,000
現物寄付金	0	156,890	0
特別寄付金	66,000,000	56,811,160	3,000,000
(内災害復旧特別寄付金)	(61,000,000)	(43,811,160)	(0)
補助金 (*2)	6,100,000	6,030,750	8,034,200
資産運用収入	1,050,000	2,983,946	850,000
受取利息・配当金	50,000	80,654	50,000
施設設備利用料	1,000,000	2,903,292	800,000
事業収入 (*3)	24,379,060	26,403,348	26,488,132
雑収入	855,000	12,552,938	855,000
帰属収入合計	180,758,599	183,959,624	135,098,989
基本金組入合計	47,000,000	- 66,235,967	- 100,000,000
消費収入の部合計	133,758,599	117,723,657	35,098,989

消費支出の部 (*4)

人件費	67,864,680	67,199,354	70,649,362
教育研究費	25,482,551	23,787,853	28,529,499
管理経費	62,490,683	63,742,551	70,159,408
(災害復旧費)	(10,610,000)	(535,040)	(14,000,000)
借入金等利息	1,878,000	1,196,410	1,878,000
固定資産廃棄差額	0	834,489	0
予備費	6,000,000	0	6,000,000
消費支出の部合計	163,715,914	156,760,657	171,216,269
当年度消費収入超過額	29,957,315	39,037,000	136,117,280
前年度繰り越し消費支出超過額	0	59,682,641	0
翌年度繰り越し消費支出超過額	29,957,315	98,719,641	0

寄付金の種類別割合

合計 102,080,031 円



【注記】

- (*1) 学生納付金には次のものが含まれる。
入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの
- (*2) 災害復旧補助金及び再生エネルギー熱利用加速化支援対策事業助成金を含む
- (*3) 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。
- (*4) 2014年度消費支出の内訳については、右頁を参照。



農産物の流通

学院の農場の生産物は補助活動として販売されるほか、学院の食材及び加工食品の材料としても用いられている。主な農産物の生産量は、米 7.19 トン、小麦粉 1.97 トン、芋類が 2.7 トン、豆類 2.1 トン、タマネギとニンニクで

0.46 トン、にんじん 1.8 トン、豚肉 52 頭、鶏 307 羽、卵 70,000 個、魚 130kg である。これらの農産物の総額は約 1,680 万円である。

貸借 対照表

statement of
financial position

2014/4/1
~2015/3/31

資産の部

	(単位：円)	
	本年度末	前年度末
固定資産	984,428,566	925,595,946
有形固定資産	868,666,673	818,953,384
（内建物仮勘定）	16,460,017	16,460,017
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
有価証券	64,930	64,930
預託金	41,670	21,670
退職金引当特定預金	7,880,144	7,146,846
奨学基金特定預金	72,625,321	72,538,176
奨学金特定預金	34,834,228	26,555,340
流動資産	143,879,375	175,806,961
現金預金	61,457,920	30,622,663
未収入金	1,088,248	382,470
貯蔵品	357,250	844,000
販売用品	1,764,379	2,787,865
有価証券	72,453,256	135,466,050
前払金	6,536,385	5,558,750
仮払金	221,937	112,163
資産の部合計	1,128,307,941	1,101,402,907

負債の部

固定負債	111,200,000	86,760,000
長期借入金	68,900,000	62,560,000
学校債	33,300,000	18,200,000
退職給与引当金	9,000,000	6,000,000
流動負債	96,236,573	120,970,506
短期借入金	63,660,000	63,660,000
学校債	16,610,000	33,210,000
未払金	1,150,741	2,810,734
未払金消費税	822,600	413,000
前受金	9,003,522	15,215,264
預り金	4,989,710	5,661,508
負債の部合計	207,436,573	207,730,506

基本金の部

基本金の部合計	1,019,591,009	953,355,042
---------	---------------	-------------

消費収支差額の部

翌年度繰越消費収入超過額	98,719,641	59,682,641
内今年度消費収入超過額	39,037,000	11,647,961

負債の部・基本金の部・ 及び消費収支差額の部合計

	1,128,307,941	1,101,402,907
--	---------------	---------------

左頁の注記の続き

(※6) 2014年度の消費支出の内訳

人件費支出	67,199,354
教員人件費	22,847,858
職員人件費	37,348,196
その他人件費	4,003,300
退職給与引当金繰入額	3,000,000
教育研究費	23,787,853
奨学費	4,123,050
光熱水費	904,600
見学費	2,444,048
実験実習費	5,775,319
学生交通費	64,060
学生渡航費	4,473,763
教材費	195,372
研究費	679,793
宿舍費	263,807
学生厚生費	437,950
職員研修費	217,649
事務費	360,196
車両費	1,940,811
卒業生同窓会支援費	155,904
特別講師費	726,900
貯蔵品の振替差額	992,000
管理経費	63,742,551
消耗品費	133,672
光熱水費	3,230,046
旅費交通費	740,692
募金費	1,169,818
車両燃料費	1,293,566
福利費	105,795
通信運搬費	667,898
事務費	3,802,382
出版物費	586,328
車両修繕費	1,438,667
管繕費	866,281
損害保険料	866,580
賃借料	1,292,372
公租公課	936,020
諸会費	184,700
会議費	267,701
報酬委託手数料	2,399,680
補助活動収入原価	4,090,251
行事費	30,861
渉外費	70,028
雑費・災害復旧費	5,354,040
減価償却費	34,215,173
借入金等利息支出	1,196,410
借入金利息支出	724,410
学校債利息支出	472,000
資産処分差額	834,489
消費支出の部合計	156,760,657



監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、2014年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

監事 波井 正明

波井 正明

2015年5月7日
学校法人 アジア学院



農村指導者
研修学生

rural leaders
training course
participants

2014年度 卒業生

the 2014
graduates

- 【バングラデシュ】 1) レハナ・イエスミン サタタ開発協会
- 【キューバ】 2) ホセ・アントニオ・サンチェス 内省と対話のためのキリスト教センター
- 【カメルーン】 3) タイトゥス・テグイ・アトンバ 北西地区養豚業者組合 (NOWEPIFAC)
4) コリンズ・イエニカ・リティカ 農村地域改革センター
- 【東ティモール】 5) アントニオ・ペドロ・デ・ファティマ・カバリョ PAC- 聖クラレチアン宣教会農業プログラム
6) カルメリンダ・ドス・サントス・アルメイダ 聖母訪問会
- 【インド】 7) マリオ・リーベロ ザビエル宣教会
- 【インドネシア】 8) ルディ・チャスルディ・ジャヒディン ルクンタニインドネシア
9) ランピタ・シラバン フンバン独立協力農業協会 10) エウニケ・ウィディ・ワルダニー トルカジャヤ基金
- 【韓国】 11) 崔元祺
- 【ラオス】 12) カムレッ・センスウーリチャン ARMI - 地域、動員と発展のための連合体
- 【リベリア】 13) ロメオ・デニス チャーチエイド
14) アリス・ハワード ルーテル開発サービス
15) マイケル・タンバ LICPMAP - リベリア総合的穀物病害虫管理農業プログラム
- 【マラウイ】 16) ブレンダ・ゼンベニ・マガンガ 聖公会シレ高地教会
17) アーネスト・ゴールデン・マガンガ カチェレ進歩的女性グループ
- 【ミャンマー】 18) クン・ミャット カチン神学大学
19) K・T・ニ・サン フアルンゴランド開発機構
20) ノー・エー・エー・シュイ ミャンマーバプテスト同盟
21) ソー・エー・ソー パンセイン ミャウミャー バプテスト連盟
22) ティ・ティ・ウィン カルヤナ ミッタ基金
- 【ネパール】 23) デバキ・クッカ タイタン
- 【スリランカ】 24) チャトゥーリカ・セウワンディ・ナーナヤッカラ セワランカ基金
25) アヨマ・テンナコーン HELP-O 人と環境をつなぐ発展機構
- 【ソロモン諸島】 26) フランシス・ンガオベラ ドンボスコ農村トレーニングセンター
- 【ウガンダ】 27) ジョン・ワルカノ ウガンダ ウェスレー教会

卒業生
インターン

graduate intern

【日本】

- 28) 荒井 光政
(2013年度卒業生)
29) 濱中 陽平
(2013年度卒業生)

研究科生

training assistant

【カメルーン】

- 30) セオドラ・ティルバーバン・
タタ
ナブチ国際基金
(2006年度卒業生)